



総会案内号

河上肇記念会会報

NO. 38

1991・9・15

一九九一年度総会御案内

酷しい残暑もようやく過ぎました。恒例の本会総会のご案内をお知らせいたします。

今年は、講師には大阪経済法科大学の林直道先生をお招きし、「私の戦時下学生生活と河上肇先生」と題してご講演を頂く予定です。多数ご参加下さるようお願い申し上げます。

一、日時 一九九一年一〇月二〇日（日）

午前十一時～午後三時

一、場所 法然院

（京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四）

会場案内図（五ページ）参照

一、臨時会費 五、〇〇〇円（会場費、昼食費を含む）

同封ハガキにて一〇月九日までに出欠のご返事を賜わりますようお願いいたします。（お手数ですが四一円切手を貼って下さい。）

目次

一九九一年度総会御案内 表紙裏

最近の河上肇文献から（一） 杉原四郎（1）

河上肇詩注余話（二） 一海知義（6）

『第三の経済学』の石川興二先生 中瀬博次（11）

特集・河上肇没後四十五周年記念の集い （18）

〔講演会〕

開会挨拶 池上惇（20）

河上肇詩朗読 西垣螢子（24）

祝辞 東京河上会、山口河上会（30）

〈新刊紹介〉 （31）

会員通信 （33）

最近の河上肇文献から（一）

杉 原 四 郎

をえた。

その一

最近木下尚江の縁者あての河上肇の書簡が発見されたり、明治末期に河上が東京で孫文と出会った事が明らかになったりした。これらについては本会報に紹介されているので、ここでは最近発見された大門英太郎氏あて河上肇書簡を紹介することにしよう。

京大経済学部で河上肇に学び、一時検挙されたこともある大門英太郎氏あての河上の書簡は、全集に二通収録されている（一九三九・五・一七日付、第二六卷、一九四〇・一二・二〇日付、別巻）が、今回大門邸の改

築の際新たに二通発見された。いずれも一九三一年、東京の河上から、検挙中の大門あてに出された書簡で、門下生の安否を気づかう河上の心情とともに、その当時の彼の感懐がのべられていて、注目すべき内容をふくんでいる。全文を紹介するが、解説に際し一海知義氏の教示

拝啓。久しく御無沙汰にうちすぎ申訳ありません。最近、大兄のお手紙の寫しが「社会運動通信」に出てゐるのを見て、不相変御元氣である事を承知いたしました。

別封をもって散歩の序に買って来た昆虫記をお送りいたします。こんなものは興味をおもちになつてゐないかも知れませんが、あまりに長く御無沙汰したので御近況を審にせず、どんなものをお送りしてよいか分からぬので、不取敢下らぬものをお目にかけます。

もし御入用のものがあれば、御遠慮なく御申越し下さい。書物位のは御一報次第いつでも御送りするつもりです。

私は昨冬労働党のブチコワシをやつて自分も除名されて出てしまいました。あなたが御不自由な所にジツとし

てゐられる間に、私は二十年間蟄居してゐた書齋を這い出て、様々の過失を犯して来ましたが、今では経験を通して多少は世態も心得、おのづから自分の「分」を知る事にもなりました。近々「資本論」上冊を刊行します。私如きものは今の時勢では何の世用も為しえぬから、せめて此の大著の全訳に老残の心血をそゝぎつくして死にたく思い定めてゐるところです。御一笑下さい。

東京市外、西大久保一三三 河上肇

大門英太郎様

四月二十一日

侍史

宛名 京都市丸太町柳馬場菊屋町合一番地。

大門英太郎様侍史。

その二

拝復五月一日付けのお手紙を拝見いたしました。ところで私の方からは過日お手紙を出して之から小包を出さうとしてゐる處へ、大兄は大阪へお移りになったと云う噂を聞いたので、小包は大阪へ宛てましたが、しかも宛書を家族のものが書き間違へたりしたために、その小包は恐らくどこかにウロツいてゐるだろうと存じます。しかし何ンにしても昆虫記は禁止になつてゐるとの事ゆゑ、結果は何じになるわけです。当地では差入が可なり自由

なやうに聞いてゐますが、貴地ではファールブルすら禁止では、遠方から本の送りやうがありません。それで——金の方は御殿父様の御心づかひで御不自由なき事とは存じながら——やむなく小為替御送りいたします。何かの品に代へて頂ければ本懐の次第です。先は不取敢右まで勿々不一

河上 肇

大門英太郎様侍史

五月四日

封筒、京都市中京区竹屋町通柳馬場東入合一番地

大門英太郎様

東京市外、西大久保一三三 河上肇

金参円小為替巻在中（書留）。

二

社会評論社から出た全三巻の『思想の海へ「解放と変革」』は、江戸期から戦後にいたる三百年の「生ける思想」のエッセンスを収録したアンソロジーである。河上肇の著作は、その第一〇巻「『国家』の批判から『社会』の批判へ」（一九九〇年一月）の中に、「日本独特の国家主義」（一九一一年）と『貧乏物語』（一九一七年）とがともに抄録で掲載されている。前者は第一部「文明

開化」批判の中に、後者は第二部「底辺」からの告発の中にある。「日本独特の国家主義」については、河上が「第二次大戦までに次第に強化されていく国家主義体制の本質を明治後期の時点においてすでに捉えていた」と小沢亘が解説し、『貧乏物語』については、大杉栄の表現を用いれば、当時はわが国の思想界で「国家的個人主義」から「社会的個人主義」への進展が見られたが、この著作もその流れを代表するものの一つであると和田守が解説している。

月刊『現代』（講談社）の一九九一年一月号と二月号とは、「近代日本の二〇〇冊を選ぶ」という、伊東光晴、大岡信、丸谷才一、森毅、山崎正和による討論記録を掲載している。百二十年間にわたるあらゆるジャンルの本から、彼らがえらび出した本は、明治十七年の久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』から、昭和五十八年の京極純一『日本の政治』までで、明治期から三冊、大正期が二冊、昭和期（二〇年まで）が三冊、昭和期（三年以降）が三冊となっている。その中に河上肇の『自叙伝』が採られている。本書について、伊東光晴はつぎのようにのべている。「これは文句なく読んで面白い。なぜなら自分の人生を綴るにあたって、関わりのあった他人に

大いに迷惑がかかるように書いてあるわけです。しかも戦前の昭和期というものがよくわかります。やっぱり、他人に迷惑がかかるような本は面白いですよ。……もつとも河上肇の経済学の本は、ここには挙げられません。というのは、たいていの場合、洋書のネタ本があるんです。……戦前の社会科学の本全般に言えることなんですけどね。その点、自伝は彼の本音ですから」。ちなみに、戦前の社会科学者の出版物で採られているのはつぎの四点である。福沢諭吉『福翁自伝』、長谷川如是閑『現代国家批判』、山田盛太郎『日本資本主義分析』、清水幾太郎『流言蜚語』。

「日本独特の国家主義」は杉原四郎編『河上肇評論集』におさめられているので『貧乏物語』と『自叙伝』と合わせてこの三点はいますべて岩波文庫でよむことができます。

立川昭二『最後の手紙』（筑摩書房、一九九〇年九月）は、死を目前にした人が最後に書く手紙は、「その人の本質をもっともはっきりと表わし、その人の生涯をもっとも集約したことばといえよう」という見方から、正岡子規から土岐雄三にいたる、明治から現代にまでの三十一人の最後の手紙をあつめて解説したものである。文学者

が多く、社会科学者としては河上肇がただ一人とりあげられている。

全集のうち五巻をしめる膨大な書簡集の中の自筆でしただめた最後の手紙は、一九四六年一月三日病床に臥す京都から郷里の岩国に住む老母たづと弟左京にあてて出したはがきである。六七才の肇から八四才のたづにあてたこのはがきの全文はつぎの通りである。

皆々様御揃ひ御無事御越年のことと存じます。こちらもみな無事で年を迎えましたから御安神下さい。お医者さんに「おかげで年を越しましたが、もし放っておいたら、此頃は死人であるか死にかけてゐるでしょうね」と申しましたら、九月下旬のあの時の様子では、私の経験では早くて十日、おそくて一月とは保つまいと思つたことでした。果してその通りかどうか分りませんが、

ともかく喘ぎ喘ぎにでも六十八になりました。只ひどい物価騰貴で之ではやり切れぬと思つてゐた処へ、原稿が売れることになり、助かりました。しかし今では葉書一枚書くのも大仕事ですが、幸に書きためたものがあるので、それをポツリポツリ売って行きます。何とまあ運の好い男だらうと自分でも不思議に感じています。もはや

窮地に陥る氣遣ありませんゆえ、御安神下さい。鉛筆書きの昨年十二月中旬の封書は未着でしょうか？

立川は解説の中で、八月十五日の直後に母に出したはがき——そこで河上は母が「もっと長生きして、まんじゅうなどがいつでも安く買へるやうになる日をおまち下さい。やがて私もかへることができましょう」と書いている——から、十月三日に「饅頭の話」という随筆を書いた母への手紙などを紹介して、「年老いた母に嚙んでふくめるように淳々と語りかける河上の一語一語は、魂の声に聞こえる」と書いている。そして最後の手紙の中で肇が「もはや窮地に陥る氣遣ありませんゆえ、御安神下さい」と母に明るく言い残したことに、読者の注意をうながしている。

三

河上肇を論じた研究文献がかなり私の手もとに集まっているが、これらはまとめて次の機会にとりあげよう。ここでは、偶然目にとまった異色の資料を一つ紹介しておきたい。

それは小学館から毎月五、二〇日に発売されている『ピッ

クコミックオリジナル』という漫画雑誌の三月五日号にのった村上もとたか『龍（RON）』第五話「時計」に河上肇のことがくわしく出てくることである。

龍というのは学生の間で「京の龍」とおそれられていた剣道の達人押小路龍のことで、押小路一鷹男爵の長男である彼が吉田の武道専門学校に入学、武専の学生と京大生とのトラブルにまきこまれるが、彼はその時の京大生が押小路家を訪問する河上肇の護衛のためについていたのと再会する。河上家と押小路家とは距離も近く親しい間柄で、龍と八才下の河上肇の長男政男とは兄弟のような関係だった。河上は京大を辞職したことの挨拶に押小路家を訪れるのだが、その時河上は龍に政男の遺言だといって河上が留学中に買って政男にあたえた時計を贈る。

話はそれまでだが、最後に「春まっさかりというのに、河上の背には霜が降りているように、龍には見えた。そして二度と再び河上に会うことはないであろうと思ったのだった」とあり、将来どこかでこの二人が再会することがあることが暗示されている。

河上肇記念会でも河上をテーマにした漫画を作ったらどうかということが論じられたことがある。その後山本

宣治の生誕百年記念に漫画が刊行されたのだから、河上の漫画化も考えてみる必要があるかも知れない。

上に紹介した近代日本の百冊にも芥川龍之介や丸山眞男の作品が入っていないのに、手塚治虫の『鉄腕アトム』や長谷川町子の『いぢわるばあさん』がとられているのである。

総会場法然院案内図



河上肇詩注余話（二）

一 海 知 義

二、「閑居」（昭和十三年その一）

昭和十三年（一九三八年）は、河上さんが本格的に漢詩を作りはじめた年である。

同年一月十三日の日記に、はじめて漢詩が登場する。

快晴なれども寒氣激し。一昨日の詩の真似事を次の如く改める。今度のは平仄もいくらか法になつてゐる筈なり。

尽日無人到

深隱不出門

倚炉思往事

举首看浮雲

文中にいう「一昨日」の詩は、日記には見えない。そして、自選詩集「閑居閑詠第一集」には、同じ一月十三日作として、「閑居」という詩題とよみ下し文をそえた次のような五言絶句がしるされている。

閑 居

尽日無人到 尽日人の到るなく、

時紛不復聞 時紛また聞かず。

倚炉思往事 炉に寄りて往事を思ひ、

举首看浮雲 首^{かうべ}を挙げて浮雲看る。

これが定稿なのであろう。日記に見える詩の第二句「深隱不出門——深く隠れて門を出でず」を、「時紛不復聞——時紛また聞かず」と改めている。平仄の法則に照らしていえば、前者の句には難があり、後者の句でなけ

ればならない。両者をそれぞれ第一句と並べ、平仄（平を○、仄を●で示す）をしらべてみると、

尽日無人到 ●●○○●

深隠不出門 ○●●○○

尽日無人到 ●●○○●

時紛不復聞 ○○○●○

となる。後者の二句、平仄のしるしが左右見事なコントラストをなしているのに対し、前者の二句は第二字目（日と隠）がともに仄（●）で、対照的でない。第一・二句の第二字目が左右コントラストをなすことは、絶句など近体詩の絶対的な要件であり、前者はその約束を守っていないことになる。しかし前者の詩も、その他の点（たとえば第四字目が左右対照的であることなど）では、平仄の法則を守って作られている。

日記が、「平仄もいくらか法にかなってゐる筈」とい、「いくらか」とことわっているのは、右の不十分さを自覚したうえでのことで、それを改めたのが、「閉戸閑詠第一集」の定稿なのだろう。

ところで、内田丈夫氏旧蔵の色紙に、「戊寅正月作」として次の一首が揮毫されている。戊寅は、昭和十三年。傍点はさきの定稿との異同を示す。

尽日無人到

世紛不復聞

倚炉思往事

回首見浮雲

また、一月十七日付の津田青楓氏および堀江邑一氏あての書簡には、日記の作と一、二の文字を異にする次の一首がしるされている。

終日無人到

深隠不出門

倚炉思往事

回首看浮雲

これらの文字の異同は、詩句中の位置等からいって、いずれも平仄の法則とは関係がない。したがって、日記にいう「（平仄の）法にかなって」いない「一昨日の詩」

ではないはずである。とすれば、出獄後の第一作ともいうべき「一昨日の詩」は、いまだに見つかっていないことになる。

『詩注』にも書いたように、右の詩を作った翌日の一月十四日、河上さんは『漢詩作法』『作詩資料及語彙』（『漢詩大講座』第四卷）などの参考書を購入している。泳ぎながら泳ぎをおぼえる、泳ぎながら泳ぎを研究する、というのが、河上さんの方法であった。「畳の上の水練」は採らぬというのが、河上さんの流儀である。

ところで、一日中訪れる人もなく、そのため「時紛また聞かず」という「時紛（時勢のわずらわしさ）」について、私は『詩注』で次のように書いた。

河上さんは、この前年（昭和十三年）六月十五日、あしかけ五年に及ぶ刑期を満了して出獄、実践活動から身を引く手記を発表して、東京杉並区天沼の寓居で暮らしていた。十二年七月七日、日本は中国に対する全面的な侵略戦争を開始。また、この詩が作られた十三年一月には、矢内原忠雄『民族と国家』、戸坂潤『読書法』、滝川幸辰『随想と回想』が発禁になっている。詩中「時紛」の語は、そうした気味もこめるであ

ろう。

こういう状況の下、火鉢に手をかざしながら往事を思い、頭をあげて空にただよう雲を眺めつつ、河上さんは作詩をはじめたのである。そして漢詩創作の最初の年である昭和十三年、さきの「閑居」をはじめとして、約三十首の作品をのこしている。

さて、河上さんの第二作は同じく「閑居」と題し、三日後の一月十六日に作られた。第一作は五言絶句だったが、第二作は五言律詩である。このあたりに、河上さんの新しいものへの挑戦というか、旺盛な実験精神がうかがえる。

律詩は八句で構成されるが、首聯（第一・二句）と尾聯（第七・八句）をのぞいた他の二つの聯、すなわち頷聯（第三・四句）と頸聯（第五・六句）がそれぞれ対句であること、それが必須の要件であり、絶句よりも高度な技術が要請される。河上さんはその困難に挑戦した。出来ばえはどうか。

作品は「閑居 其二」と題し、日記にも「閑居閑詠第一集」にもよみ下し文をそえて見え、文字に異同はない。

爛漫朝眠後 爛漫たる朝眠の後、
携孫就午陽 孫を携へて午陽に就く。
読書歎非才 書を読みては非才を歎じ、
曳杖愛長塘 杖を曳いて長塘を愛す。
紅火煮新茗 紅火新茗を煮、
青燈夢故郷 青燈故郷を夢む。
無為無病叟 無為無病の叟、
閑裡四分忙 閑裡四分の忙。

第三・四句の、

読書 歎 非才
曳杖 愛 長塘

第五・六句の、

紅火 煮 新茗
青燈 夢 故郷

いずれも対句で構成されている。

対句は、となり合う語、あるいは語句が、対称的（シンメトリカル）で、そのうえ対照（コントラスト）を成していないなければならない。その点で、紅火と青燈は常套的な対だが、新茗と故郷などは手のこんだ対で、なかなか

かの出来ばえである。

一篇の大意を直訳的にのべれば、

ぐっすりと眠って目覚めた朝、孫を連れて真昼の太陽のもとへ散歩に出かける。

書物を読んではおのれの鈍才をなげき、杖をついて長い堤をよく散歩する。

赤くおこった火で新茶をわかし、青い灯のもとで故郷のことを夢みる。

何もすることのない、体だけ丈夫なこのじいさん、ひまなようでも、一日のうちの四分はけっこう忙しいのだ。

「閑人にも忙事あり」で、詩の第六句までに見える散歩、読書、喫茶が、このじいさんの「忙事」だと、やや自嘲の気味をこめているのだろう。

なお、青燈は、黄卷青燈ということばがあるように、読書のための燈火、あるいは夜ふけのともしびをいう。

この詩、形式上の欠陥を探せば、たとえば仄声の文字を置くべき第三句末尾（第五字目）が平声の「オ」となっていることなど、問題が全くないわけではない。

しかし、厳格な法則（脚韻、対句、平仄など）にがんじがらめにされた律詩の、いわば素人による第一作としては上出来であり、何よりも「実事」の詩であるところ

がよい。

私はかつて「矛盾と実事——河上肇と陸放翁」という文章（『文学』一九七八年七月号、のち一九八二年岩波書店刊『河上肇そして中国』所収）の中で、河上さんが鑑賞するにしろ創作するにしろ「ウソの詩」を嫌い、詩においても「実事」を重んずべきことを主張し、実行しようとしていたことについて、やや詳しく紹介したことがある。

すくなくない日本の漢詩人たちが、とりわけ戦時下において、虚飾にみちた「ウソの詩」を乱発していた中で、静かに「実事」の詩を作りつづけた河上さんの存在は貴重である。

律詩第一作「閑居其二」は、河上さんのその後の作詩、漢詩創作の態度を予見させる作品でもある。

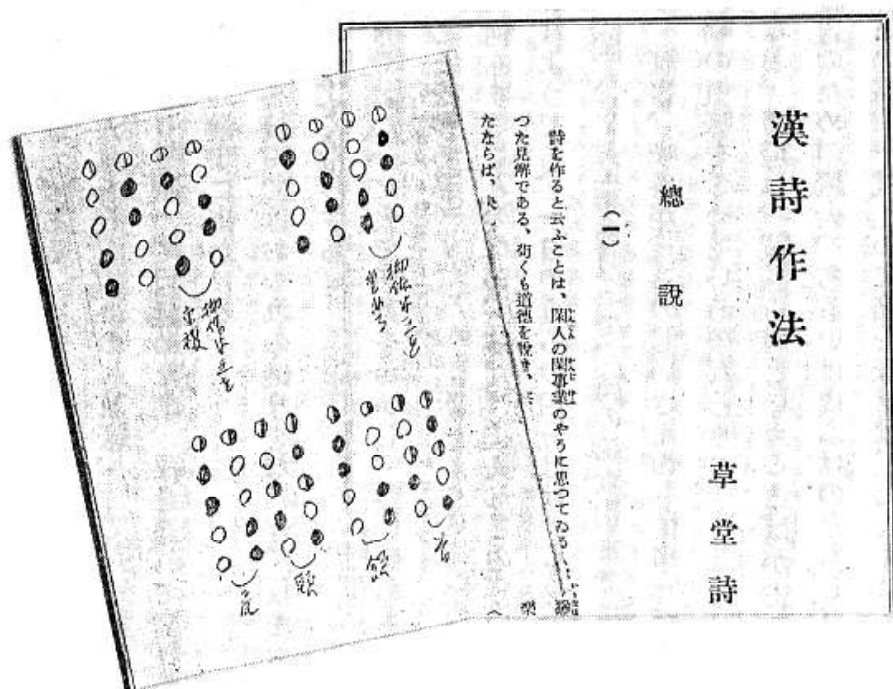
なお、一月十七日付の津田青楓氏および堀江邑一氏あて書簡に、右の律詩と第一・二句と第八句だけを異にする作品がしるされている。河上さんのよみ下し文をそえて示せば、第一・二句は、

推枕晨朝起 枕を推して晨朝に起き、
携孫弄霽光 孫を携いて霽光を弄す。

第八句は、

閑裏独楽忙 閑裏にひとり忙を楽しむ。

この第八句、平仄が合っていない。また全体として、さきの作の方が表現に無理がない。日付は書簡の方があつたが、やはりさきの作の方が定稿なのであろう。



「第三の経済学」の石川興二先生

中 瀬 博 次

河上肇記念会会報第三七号（一九九一・五・一）に寄せられた鈴木一典氏の論文に関連して、石川先生に就いて原稿を寄せるように、大門英太郎先輩や、毎日新聞の小島康生兄から、又事務局の沖本彰さんからも御手紙でプッシュを受けて、梅雨明けの夏空の下で老耄の禿筆を採ることにした。誤っている所はご叱正を乞う。

石川門下には敗戦直後京大経済学部教授会全責任を負って辞任された時の筆頭助教授で、教授を目前にして経済学部教授会が筋を通していないと云って辞表を鳥養利三郎総長に提出、慰留にも耳を籍さず昂然として最初の名誉助教授ですと「石川事件」での教授会の責任を問い続け、後に彦根高商（滋賀大経済学部）教授に転出、更に末川立命館学長に乞われて立命館教授になり、一年後には過労で執筆中の筆を折られて早く逝去された、石川先生の信任の最も厚かった白杉庄一郎をはじめ、京大名誉

教授の出口勇蔵、石門心学で学士院恩賜賞の近代名誉教授中靖一、「第三の経済学」の祖述者で関連出版のある日大名誉教授桑原晋、満洲建国大学から引揚げ大分高商（大分大教育学部）教授の筒井清彦、石川教授事件で白杉門下に転じた滋賀大経済学部教授松尾博、香川大経済学部教授金森恒利等多数の逸材を輩出している。京大では経済学史、経済哲学、経済思想史を主として担当せられていた。（註）「石川事件」第三の経済学（哭参照）

石川先生は東大法科から京大に転校早々に西田幾多郎先生に会って爾来基本的な学問・哲学の研究に又講義に依って教を受けられた。又西田先生も、石川先生から聞いたことであるが、京都の丸善書店から思想弾圧で販売停止になる前に二つの原文のマル・エン全集が経済学部寄贈されたが、最初に之を読まれたのが経済学部の教

授ではなくて西田先生であり、貸し出しの責任教授名は河上先生、その労を取ったのが石川先生であった。

(一九三〇年頃第三経済学P三六四、三六五)

石川先生の最初の著書一九三〇年有斐閣の「精神科学的経済の基礎問題―国民主義経済学の基本的研究」の第一版序に「経済学派が対立闘争せる今日の経済学界に在って、経済学的真理を求めんとする者は、其の一に組みし他を排すべきにあらずして、此等諸学派を止揚綜合し以てより具体的全体的なる経済学的真理の確立に進まねばならない。」として、ディルタイの「生の哲学」とアリストテレス・アダムスミスの三者を「実践」と「科学」と「哲学」と「生」の統一的态度を以て止揚された具体的全体的な精神科学的経済学の基礎を顕さんとする。また同著第四版の序に「現代の資本主義制度が人間の生命の眞の發展を阻害しつつあることは、最早や何人もこれを蓋ふことの出来ない事実となった。これを革める為の立場については、社会主義と国家主義と、復古主義と国民主義との区別が明確にされねばならない。この中、国民主義のみが内に向って一国の成員たる各人の人格的生命を、また外に向って各国民の人格的生命を眞に發展せしめ得るところのものである。而もこの国民主義のみが、

これ等相争える諸立場を止揚統一する最も具体的な立場である。」から出発して一九四〇年二月初版の有斐閣「新体制の指導原理―我国体に基く現代の革新」に於ては、ヘーゲルの唯心弁証法とマルクスの唯物弁証法から絶対弁証法に止揚された。自覚的国民共同体、そしてアジア共同体、世界共同体が指向される。早くから関心事であった資本主義制度の本質と現代社会悪はここに於て解放される、とした。

石川先生の史的発展論は、各時代の生成、發展から没落の過程に於いて次なる時代の生成の契機を育成している。原始血族共同体が氏族団体を發生させ、これから莊園領主、中世的な全体主義的な權力支配社会、封建社会が生れる。近世に入つてブルジョアジー、個我的自覚と産業革命、 $G \rightarrow W \rightarrow G$ の商業資本から $G \rightarrow W \wedge A \cdot P \rightarrow m$: $P \rightarrow W \rightarrow G$ の産業資本が生まれ、近世個人主義社会は少数の有産者が多数の無産者を支配するに到り、ここに資本主義と社会主義の対立抗争が生れる。之を解放するのは自覚的な個と全とが絶対的矛盾的自己同一体としてのアジア、世界を視野に於いた国民共同体でなければならぬ。(新体制時代の發展的構造 P二、P五、P六、P一〇三)

私は石川先生がアリストテレスの研究で得られた共同体と「私有公用」を経済的革新原理として資本主義制度の本質と現代社会悪から解放の大きな意義を認められ、国民共同体的生産と配給の中で中心的に置かれていることに注目する。プラトール・マルクスの共有に対し、アリストテレス的な自愛心を認め、私有共用から私有公用を主唱される。(新体制P四〇～P二五)

ここでは医療と教育は当然の公用に属し、階級と云うものが根本的に否定されて実質的機會均等を主張、特に「国民の総てが能力に応じて教育を受け得るならば教育の為の費用程生産的なものはない。」と強く主張された。五〇年前の大戦下の教育と教育者の問題は極めて今日の示唆に富む。(新体制P六、P六九)

石川先生は、曲ったことの大嫌いな筋道を通す、世俗的な毀譽褒貶にとらわれない、物欲にも活潑な一面芸術家、一面宗教家的美意識の強い、正しいことは直截に強く主張される。それも哲学的論理的に。だからたじろいだり抵抗出来ぬ程の者には深く意趣を返さんと感じる者もあったに相違ない。敵と味方にきっぱり分れるタイプであった。だから大戦中、一九四三年には前期「新体制

の指導原理」での主張「治安維持法が国体の原理である天皇を利用して資本主義体制を保持せんとする点で社会悪である」を以て原枢密院議長が天皇の前で危険思想をもつ京大教授と讒誣した。そして休職となる。(石川事件)(第三の経済学P四四)そして二年後戦後になって学部長時代に羽田総長を動かした文部大臣に直接折衝、新講座の増設と共に認められた京大人文科学研究所の教授に復帰されたのもほんの束の間、今度は大東亜戦の理論的基礎づけをしたものとして、あろうことかマックアースー司令部の追放第一号に遭遇される。一個の人間の深き思想が或時は左翼危険思想であり、或時は右翼国家主義となるものであろうか。何れもに就いて、京大経済学部にて学問思想系統によって学閥なるものが存在し、自己が不利を受けたと考へる私怨を学内から断片的な論文の一節を証拠としてその筋に提供すると云う、極めて非学問的な行為が存在した結果であると、私は現在も尚その感覚でこれを批判的に見ている。戦後復員した私が教授会決定で「仮令定員外となっても経済学部助手に復帰を認める」がいつしか「人文科学研究所助手になれ」と一変した事実、私は京大を去る決意もこの学部内の誠に倫理感なき教官に対して、軽侮の念を抱くことからであっ

た。今も尚教授と云う肩書きだけに対して畏敬の念を持ち得ない。人間の価値は人間そのものにある。

悪いことに人文科学研究所と講座増設の交渉の相手が文部大臣であった陸軍大将荒木貞夫であって、次の文相の橋田さんではなかったから、荒木とタイアップしたとの妄想を誠にやかなデマとして流布させる術策にも嵌まった。終戦後橋田文相は自決。

京大文学部の天野貞祐教授が文部大臣となられて「道理の感覚」にも厳しい方であつたから不当な処置の解除に努力されて一九五二年になって石川先生は追放解除となり、京都学芸大学教授をされ、定年後は京都女子大学教授となり、持論の教育改善と教育者の栄進を強力に進められる。以前からの西田哲学の立場を基底として、資本主義経済学と社会主義経済学を止揚した世界形成の経済学としての世界国民共同体論が上梓、有斐閣一九六六年「第三の経済学―西田哲学に基く世界形成の経済学」となる。

石川先生のこの一巻の叩き台に参加したのが白杉庄一郎先輩である。先生はとなりの芋畠を耕しつつも、軍手で口角の泡を拭い乍ら私にも切株を座して、この構想を熱っぽく語られた。一瀉千里の胸中の想を一挙に吐き出

すが如くであつた。吉田神楽岡町の先生の私財で増築されたと云う二階の明るい座敷でも、先生の構想に積極的に鋭く自己の批判を挟まれるのは常に白杉先生であり、この風景は傍観するだけでも師弟間の心の麗わしい討論であり、忌憚ない清風のような快い時間が延延と続く。「こうして私達は京大における演習を三十年間に互って続けることになったのである」(第三の経済学P五)

この吉田神楽岡町三の石川先生の居宅は、元来借家で橋本関雪画伯の云わば側用人であつた元警官の建てた平屋一戸建の吉田神社の奥宮から笹の道を少し下つた所、銀閣寺道から元電車道の角の公衆便所から広い通りを後一条帝陵の方向へ南へ下ると今もあるか(?)古い「田中」と云う学生食堂の一膳めし屋と、今は石垣の上になつたテニスコートの間の道を吉田山に登る坂道(路地)の一番上の二階家であつた。先生は二階の座敷と控えの間と東に突き出した如意ヶ嶽を一望に納める三畳の三部屋と階下の各部の改造を自費で行われて風雅な快適な住居に一変されて、後々までも大変お気に入りであつた。改造費もかなりの額の負担であつた。

或る時、敗戦の年の十一月頃ではなかったか、この先生の二階座敷で例の通り長い時間の石川先生の所謂演習

のあと、河上先生がお見えになってご挨拶したことがある。私にとって初対面で且最後である。河上先生は折か弁当箱の様なものを提げて来られていて「石川さん、これ寸じだけれど」と云う様な言葉で、折から食糧難の日頃の愛弟子を慰問されていた。甚平姿で京の時代劇の水戸黄門の様でたしか杖を持っていた。本当に心温まる光景であった。河上先生没後、石川先生は何か彼かの行事に河上未亡人を手厚く招いて居られて、私が何回か三高東のお宅に送って行ったことがある。

河上先生は京大教授の時に、京大内に講座のある講義は別に学外から講師を迎えないと定められていて九大教授で当時経済学部で社会学を担当の高田保馬先生が九大に引き揚げられ、そのあとの研究室に石川先生が入られた。後年河上先生が京大教授を活動の為辞任された年に、高田先生は京大教授となり経済学原論を担当されることになる。之が先に触れた悪い学閥対立の禍根となったのではないか。忌まわしい学問の府の現実と云うべきか。高田先生は頭脳のすぐれて明晰な神官や村長の経歴もある、和歌に才能を発揮される、私には国家神道的な思维様式を持って居られた先生だと思う。「ローマを遠ざか

る程民強し」とか「貧乏必勝論」とか基本的な面で石川先生のご思想とは相納れぬ。頭腦的な暗闘は一層影どす黒く、陰惨なことは、何も「白い巨塔」の小説上のことではない。石川先生のご思想は要するに、唯心のヘーゲル、唯物物のマルクスの二大弁証法の上に西田哲学の絶対弁証法に基づく自覺的な共同体社会を構築せんとするものであって、資本主義社会の矛盾罪惡に早くから公憤を抱き、元來東大法科に入学されたが「東大が老化しているに對して、東大出身の新進の学者が集まっていることを知って京大に転学」された。そして京大入学当初より西田先生のアリストテレスの「第一哲学」「デ・アニマ」の講義を受け、又デイルタイの「生の哲学」、ヘーゲルの「法の哲学」を学ばれる。又一方京大「大学院に於ける私の指導教授ともなつて下さつた田島錦治先生と河上先生よりは研究上のみならず一方ならぬご配慮を頂いた」。日本の根本構造を英國的な個人主義と獨乙的な全体主義とを止揚するところの更に具體的な（自覺的な國民共同体と後に明確になる）ものと規定しこれを初め「愛の結び」と呼んだ。（一九三〇年「精神科学的經濟学の基礎問題」）

又謂う。「ヘーゲルの唯心史觀が精神の發展に注視し

たるに對し經濟的生産力の發展を土台として人間社會の發展を考察したものはマルクスの唯物史觀である。この兩者を止揚する國民主義の史觀は、マルクス史觀及びヘーゲル史觀に於けるが如き必然史觀と異なつて実践史觀である」(精神科學的P 四二) 人間社會の自然的状态(原始血族共同体)より封建的社會(全體的社會、權力社會)に更に市民的個人的社會(個人社會)へ「更に國民的總體的社會に進むと云ふことは人間の必然的なる發展ではなく、發展的理想型なのである」と。

「第三の經濟學」が出版された頃、有斐閣の常務であつた新川正美兄とは海軍主計短期現役五期の同期生で、最も仲の良い氣の合う一人であつたので石川先生が交渉相手とされてゐた有斐閣京都店長とのルートの他に、伝聲管の役割を果たすことが出来た。爾後の處理に就いても新川兄の配慮で總て完了した。

この著書には「新体制の指導原理」にあつた「天皇中心の國民共同体」と云う考へ方は消えている。制度としての天皇制に就いて、熱っぽく語られることは、元來戦前にもなく、戦后にも見られないのは、明治帝の中に純粹な國民共同体の中心たるべき片鱗を見て理想型として、

先生の直情型で採り上げられたのではないか。但し母堂に關しては、到る所で随時に熱く語られている。「母の強い愛は、自分の子供に限られたものではなく、他の人々に對しても豊かに現れたが、貧しい人に対しては特に強く現れた。このことは、私共の子供心にも深い印象を与えた。今や私は、この母の愛を繼承すべき生涯の仕事を見出し得た思ひがした。かくて社會問題の研究に志した自分は、これに専も適する過程として京都帝國大學の政治經濟科に入学した」(新体制)

石川先生は、西田先生がマルクスの「物」と云うのは「作られたもの」であることを常に述べている点を重視されている。西田先生は、「作られたものから作るものへ」として、物を通しての具體的な弁證法的發展と「資本論」のはじめの商品↓貨幣↓資本の發展において見られた。又「この西田哲學―善の研究の立場は意識の立場であり、心理主義的とも考へられる」のが、「マルクス經濟學を通じて具體的な弁證法的立場に發展したのであり、これを知ることとは、觀念論的立場に立つものとして誤解されることの多い西田哲學の正しい理解のために重要である」「先生の弁證法的世界は、時間空間の矛盾的自己同一の生界である」「私が此處に在るとは、

空間的であると共に時間的である。空間的客観的であると共に時間的主観的であり、一般的であると共に個物てきである―」と「西田哲学から経済学へ」と企画される。

法然院の先住で神戸大学教授であつた橋本嶺雄先生が私達に語られたことがある。橋本先生は、石川先生の思想、人格に触れて大いに感激、尊敬するに到つた。そこで新墓地以外の古い境内の中に、有名人の墓に伍して石川先生夫妻の墓地と隣に河上先生の歌碑と墓碑を広くお譲りしたのであると。皆の知る如く河上先生は達筆で風格のある書を沢山石川先生に与えて置かれた。中でもこの万葉仮名の三幅対の「たどりつき」の一幅から歌碑が生れた。(第三の経済学P三九(三))

当初「河上肇会」は石川先生がご令嬢の晴子様に事務局の責任を持たせ、河上夫人をお迎えして十七回忌を営まれる。又この時巧芸印刷で著名な京都の便利堂の中村桃太郎社長が石川先生の演習生であつたこともあつて、河上先生の竹筆の「聞説……」の法然院の詩の複製の大小色紙など立派な記念品として頒布されたのである。

後記(想い出すままに筆をとつていて、気がつくとも既

に指示されたページ数をオーバーしている。まことにとりとめもない書きぶりで恐縮であるが、責任を之で許して頂くことにして擱筆一九九八、七、二三)

又憶う。経済学が物的価値に関する学問である限り、唯物経済学はあり得ても唯心経済学はあり得ない。だからこそ真の人間の社会に具体的に存在する物は西田哲学の目で見なければ具体的ではなくなる。肉体的精神的存在として人間によって作られた物は一面に於て精神的労作でありそれを荷負うものとして物的労働力の生産物である。第三の社会に於ける経済学とは何であるべきかが問われている。物的経済学と心的経済学の上に第三の経済学があるべきだと考へるべきではない。

第三の社会構造理想型に於ける経済学と云うことを見失うべきではない。と。



河上肇没後四十五周年記念の集い

一九七九年、河上肇生誕百年記念集会在東京と京都で開催され、八六年には全集完結・没後四十年の集会在京都と大阪で、八九年には生誕百十年記念講演会が京都で

開かれました。それで今度は没後四十五年の集会は大阪でやろうとは昨年から事務局の方で話が出ていました。一月三十日が命日なのでその前後の土曜日か日曜とまでは話が煮詰まったのですが、講師先生を誰にお願いするかとか、「この時期は一番寒い頃やでえ」とか、若者ぞろいの事務局が巡するうちに五月になってしまいました。

今回は河上肇と何かと縁のある元南海電鉄会長故川勝伝先生等を中心に長らく大阪で活躍されている無葉会との共催が実現し、講師先生も快諾され、企画決定以降は関係者の御努力で当日を迎えることが出来ました。ただ残念な事は世話人代表杉原四郎先生が入院、大門英太郎事務局長が急の公用でご出席願えなかった事です。にもかかわらず一応所期の目的を達成し、盛会のうちに記念の集いを終え、事務局一同ほっとしております。お世話

になりました関係各位に厚くお礼申し上げます。当日の模様を簡単に報告します。

会場は交通の便のいい大阪郵政会館。いつものように開会一時間前の正午に事務局は準備を始めました。定員八十数名の会場が八割がた埋まった定刻一時過ぎに細川さんの司会で開会されました。

開会挨拶

京都大学教授 池上惇先生(別掲)

講演「河上肇と孫文」

神戸大学教授 一海知義先生

(次号掲載)

同質疑応答

河上肇詩朗読 あめんぼ座主宰 西垣瑩子先生(別掲)

休憩(約十分)

講演「現代の資本主義と社会主義」

大阪経済大学教授 置塩信雄先生(次号掲載)

同質疑応答

閉会挨拶 無葉会

藤木福太郎氏

閉会は予定をやや延長して四時二十分。会場は満席で、若干の方には補充の椅子も不足してご迷惑をおかけしましたが今回は入場をお断わりする事もなく済みしました。当日の記念会新加入申込者六名、会報バックナンバーも六十数冊が売れました。

引き続き同会館グリルで交歓会を持ちました。(講師三先生をはじめ参加者三十人余)。進行係小嶋さんの軽妙な指揮で、それにビールと御馳走が並んで、和やかな雰囲気のままにあつと言う間に二時間が経過しました。

東京・山口会等よりのメッセージ紹介(別掲)

乾杯 小泉参次氏

河上肇漢詩中国語朗読

中国人留学生大阪大学 王紅さん

それに自己紹介を兼ねた参加者の一言発言もあり、賑やかな場になりました。講師先生の周囲に人垣ができ、質問を投げかける人もいました。王紅さんは紅一点ということで(いや、西垣先生ほか数名の女性も)人気者でした。六時半に閉会。肩の荷を降ろした事務局は講師先生をお誘いして隣の東急インホテルで反省会(?)を持ちました。

なお今回の記念の集いに先立ち、五月十六日の毎日新

聞夕刊に一海先生の「河上肇、孫文に会う」元同僚記者の回顧談から「新事実」の記事が掲載されました。他方事務局からは大阪を中心に約三十大学に当日のちらしを送付し、学内掲示を依頼しました。しかし当日の出席者は年配の方が大半でした。それから当日の講演その他は別掲していますが、いずれも素人がテープを巻き起こしたものであり、文責は事務局にあることをお断わりいたします(事務局 紀平生)。



〔河上肇没後四十五周年記念講演会〕

開 会 挨 拶

ご紹介にあずかりました池上でございます。本日は皆様方、ご多忙のところかくも多数ご参加賜りまして誠にありがとうございます。世話人を代表いたしまして厚く御礼を申し上げます。本来でございますと世話人代表の杉原四郎先生がご挨拶の予定でしたが、ちょっと病状が思わしくございません。本日は残念ながら参加できないということで、皆様方には呉々もよろしくということでございます。杉原先生は一貫して河上肇研究ということで、岩波書店から出ました河上肇全集等々も中心になってご推進いただきました。現在思想家としての河上をこの日本にも大きく位置づけられた先駆者でございます。ただ、さきほどお伺いいたしますとご病状はやや好転して来られた由でございます。どうかご安心を賜りますように。

池 上 惇

開会の挨拶ということでございますが、私はこのところ京都大学でいろいろと河上の業績等につきまして研究もしている立場にございますのでそのような意味で皆様方のお手許に、これは名刺代わりに、簡単な抜き刷りをお配りしております（事務局注 京都大学経済学会・経済論叢第二四 巻第5・6号抜刷「いま、河上肇『貧乏物語』を読む——『貧乏物語』におけるラスキン思想の現代的意義」）。また時間がございましたら是非御批評賜りたいと考えている次第であります。私の見ます所、現代、河上肇は着実に復活しつつあると見ております。その理由は二つございまして、一つはやはり今日の日本の情勢と申しますか時代と申しますか、それが河上の思想を必要とするような時代になって来たということではなからうかと思えます。人権とヒューマニズムという原

点に立ち返ってあらゆるものを見直そうという時期になって来ました。今まではどちらかと言うと人権とヒューマニズムというものは科学の陰に隠れてなかなか表に出て来ないという要素がございました。やはり人間というのは科学だけを頼りにしては過ちを犯すものであり、またしばしば行き過ぎもあるものでございます。やはりこの際、科学では分からないこともあるので原点に返ろうという動きが出て来ておる訳でございます。しかし同時にそうであればあるほど、それを必要とするということとは人権とヒューマニズムの危機の時代でもあるということでございます。日本におきましても大変な事態、戦後の憲法が制定されて以来、最大の危機に直面しているとおしても過言ではなからうと思います。そのような意味で河上復活のきざしというものがやはり人権とヒューマニズムを一貫して貫くという人間の立場というものを改めて私達に思い起こさせるものだと思っております。

いま一つは最近、文化芸術に関する日本国民の全般的関心が異常な高まりを見せていることでございます。ご承知のように河上はもととが文化経済学、と言うよりはラスキンの文化経済学に大変傾倒いたしましたして経済学の道に入っております。今日ラスキン、およびその弟子

モリスの著作というのは続々と復刻もされ、刊行もされ始め、伝記も数多く刊行されております。これは晶文社という出版社が大変熱心でありまして、それが出て来た大きな理由は最近の日本のすべての分野におきまして文化ならびにデザインを無視してはもはや生活が成り立たない状態が至る所に出て来たということでございます。モリスという人はデザインの専門家でもございまして、民衆の立場に立った室内装飾というものを提起し、推進した方でもございます。この方の日本における研究は今ブームを迎え、ラスキンより一歩進んで、こちらの方は既にデザイン・工芸関係者の間では圧倒的な影響力を持つようになりました。河上もあの「貧乏物語」を書き出した時はラスキンというものをひとつの参考にした、そこから多くを学びまして芸術や美というものを追求する立場から経済を見ればどのようなか、人間というものを全面的に発達させる為にはどのような経済機構が必要であるか、ということを中心にして論じております。貧乏というものを考える時にはいわゆる金銭で計れない人間の心の尊さというものを経済学者がどのように大事に扱うかということが決定的に重要だということを強く主張しております。

今日の日本の社会におきましてはいわゆる心の豊かさに関する数多くの考察・文献等々が現われまして、それらを研究して参りますとすべてそれは河上に行き着くものでございます。とくに河上先生の「資本主義経済学の史的発展」につきましては、文化経済学の原点ではないかとの指摘が出て参っております。そのうちに恐らくこの書物も改めて経済学者及び多くの方々の目の前にもう一度現われて、必ず正当な評価を受けるものと私は確信しております。今日そのような意味におきまして没後四十五周年の集会がこのように盛大に持たれますことは私共関係者にとりましてもの上ない喜びでございます。学生諸君も「河上の名前を知らない」等と言われまして随分と久しいのでございますが、恐らくは今日は文化経済学を通じて河上の名前がもう一度彼等の中で議論されるという状況が次第に出て来ると思われます。又そういう学問を研究しようという若い研究者も多数現われるようになりました。そういう意味でも皆様方の永い間の御苦労がどうやら実り始めたのでなからうか、このように考えております。

本日は河上肇の専門家といたしまして承らくの間、とりわけ河上肇の漢詩を中心にいたしまして研究を積み重

ねて来られました、言わば芸術家あるいは詩人としての河上肇をこの社会の中に経済学より一步進めて既に定着させていただいております一海知義先生に河上と孫文との出会いを中心にお話いただくことになっております。先生は私どもの先輩でございます、京都大学の文学部の中国文学、これは昔吉川幸次郎先生が河上さんの自叙伝にも登場されますが、その学統を引かれた方でございます、今日の河上肇研究を杉原先生と共にがっちり支えていただきました第一人者でございます。いつも我々は河上先生の字が大変うまくて読めませんので、一海先生に読んでいただいてやっという意味がわかるというのが実態です。今日の日にふさわしい御報告をいただけるのではないかと存じます。

いまお一人は置塩信雄先生です。先生は恐らく河上肇研究におきましては初めてのご登場かと思えます。今日の経済学、とくに世界的なレベルで見ますと日本に於ける代表的人物でございます。私に言わせるとノーベル賞を貰っても何の不思議もない。その意味で置塩先生は経済学についての、その幅の広さにおきましては当代随一の方でございます。経済学者というとマルクスしか知らない人、近代経済学をやるといって近代経済学しか知ら

ないという人がたくさんおります。河上先生は勿論ちゃんと両方やられた先生なのですが、置塩先生は一貫して総合的に全部知った上で科学的に緻密な論理の構成を組み立てられました。とりわけ資本蓄積論の分野で国際的な業績を上げられまして、恐らくイギリス等の学界では置塩先生の名前を知らない者は誰もいないと思います。その意味では日本で海外で知られた学者としては森島先生と並ぶ日本の経済学者の巨星であります。

同時に先生のご労作は基本的に河上によく似ております。徹底した人権とヒューマニズムの立場に立って、人間というものを基本において経済学を考察される広い視野をお持ちであります。河上はご承知のように経済学というものが単なる人間の利害関係、とりわけ私的な利害関係というものだけで経済学が理論化をはかるのを大変嫌っていました。その背後にあるもっと広い基礎にあるものを追及しようと一貫して心がけて来ました。勿論それは大変な苦痛を伴うことで、河上はまさにそういうことを試みた為に最後は文字通り身を挺してファシズムと戦わねばならない、そういう立場に自分を追い込んだとも言えるかと思えます。置塩先生も最も根本的な人間の存在にメスを入れるような経済学を日本において追及さ

れ、いろいろ国際的に大きく影響力を発揮されて来た先生でございます。神戸大学で長らく教鞭をとっておられ、現在は大阪経済大学にいらしゃいます。本日にふさわしいお話が伺えるのではないかと思います。

詩の朗読につきましてはさきほど司会の細川さんから丁寧なご紹介がありました。京都で長らく河上肇の詩を読む、そういう会がずっと続いておりました。これは河上の思想というものが学者が語る単なる知識や思想ではなく、生活の中に文化や芸術として定着しうるということを実証して来られた成果ではなからうかと存じます。真の思想家はやはり美や芸術や文化というものを出発点において、その故にこそ人間性を最高に発揮しうる、そういう条件を絶えず探求しながら真理を追及して行かれたのではなからうか。その意味で真理中の真理は芸術や美に近い、とはしばしば科学者の申す通りでありまして、河上をしのぶにふさわしい企画かと思われまします。準備に当たりましては小嶋さんはじめ事務局の方々がいつものことでございますが本当に献身的に準備をしていただきました。お蔭様で今日まで私共こうやって勉強する機会を与えていただいた次第でございます。冒頭に当たりまして心から御礼申し上げます。

また本日は大阪で長らく伝統のある河上肇に関する研究会、とくに故川勝伝先生がご尽力いただきまして、ずっと続いて参りました無葉会との共催をも実現することが出来ました。本当に心から嬉しく思っております。どう

か皆様方、心ゆくまで河上につきまして議論が深まりますようお願い致しまして開会の挨拶と致します。本日はどうもありがとうございました。

河上肇詩朗読

西 垣 瑩 子

たどりつきふりかへりみれば山川を

越えては来つるものかな

これは河上先生の短歌の代表作になっております。

私が初めて河上先生とご縁が出来ましたのは、まあ「貧乏物語の河上肇」という位の知識はあったんですけどそれまであまり存じなかったのです。今から十二年前ですか「河上肇生誕百年祭」というのが開かれまして、やはり同じ河上記念会の皆様方で、東京でもあって、京

都でもあったそうですね。その時にいろいろ資料を頂きまして、こういう写真まで頂きました。それから色紙、大変な達筆だそうですね。それでその後、京都の杉山幸男先生が中心になって「河上肇音読会」というのが開かれました。月に一回集まって河上肇の作品を朗読する、回し読みをするという会があったんです。まず最初に「貧乏物語」から始まりまして、「自叙伝」なんかも読みました。その時、私が発声発音のご指導をしたんです。

アエイウエオと、口を大きくあけて、声を出すトレーニングしてから、朗読に入りましたの、とても楽しかったです。

それがご縁で、河上肇音読会三周年という時にひとつ何か河上肇の伝記のようなものをドラマみたいにならめようかと一冊のシナリオを杉山先生がまとめられました。構成譜「山川を越えては越えて」というタイトルでした。それでその時に三周年記念のお祝いの会に、私がやっております朗読の劇団「あめんぼ座」が十人ほど、そして音読会に参加されている何人かで上演しました。そう、コラスも入りましたね。それが割合に好評でございました。その時から河上肇先生が私なんかにはごく身近な感じになりました、この「たどりつきふり返り見れば山川を」という歌なんかも自分の胸の中にいつもありまして、「言うべくんば真実を語るべし」なんて、一つ一つの言葉がふと思い出されたりし、とても身近な先生という感じがいたします。今こそむしろ河上先生の激しい気骨のある気性を蘇らさなくてはいけないんじゃないかなあなんて私は思ったりするんです。

そして河上先生は人間味溢れていらしですね、とてもユーモアのある詩も歌も書いておられます。奥様の秀夫

人との間で丁度万葉集の詩にあるような相聞歌的な短歌なんかも作っていらっしゃいますので、そんなのを少しご披露して人間河上さんの一端を感じて頂けたらいいんじゃないかと思えます。

始めに朗読しました「たどりつき……」の歌は党員になられまして隠れ家に住まわれた時に、初めて我が道やっとたどり着いたというような安堵感から独り言のように詠まれたのです。昭和七年の作とされています。そしてその時は東京にいらしたのですが、その時は官憲の手入れがありまして入獄された時期があった訳ですね。二年か三年、小菅刑務所に入獄されていたのですけど、その時に奥様が面会に来られて、その時の短歌がありますので一寸ご披露させて頂きます。昭和八年と書かれていますね。

限りある惜しきいのちをひとやにて

今歳の春も過ぎしぬるかな（肇）

ひとやなる君をたずねて帰るさの

荒川つつみ草萌えにけり（秀）

一年は夢と過ぎ去り今はまた

荒川つつみ草萌えんとす（肇）

一年が経ちまして次は三年目の歌になります。

三とせ越し通ひなれたる小菅道

ことしは春も雪深くして（秀）

三とせ越し葛飾の野の牢獄に

われを見むとて通ひ来たし妻（肇）

鉄格子越しですけれども河上肇先生と奥様が本心に心を通わせながらいらした感じが歌われております。

それからその頃の詩なんですけれども、これも河上先生の非常に人間らしい側面です。

獄中にて詠める歌

旧い友人が新たに大臣になった　とういふ知らせを読みながら、私は牢の中で　便器に腰かけて　麦飯を食ふ。別にひとを羨むでもなく　また自分をかなしむでもなしに。勿論ここからは　一日も早く出たいが、しかし私の生涯は　外にいる旧友の誰のとも取り替へたいとは思はない。

非常に考えさせられる詩でございます。

そして続いて一番の名作とされています「味噌」という詩です。お嬢さんの、次女の芳子さんが大連に行かれました、そこで病気になるれました。奥様の秀夫人が病気の看護がてら、暫く大連に滞在されております。昭和十八年と書かれておりますね。その時に一年ほど河上先

生が一人で京都の北白川の所なんですけど、お住まいになつておられた時に書かれた詩なんです。ですから一人で生活していらっしゃるということが書かれております。

味噌

関常かんつねの店へ　臨時配給の

正月の味噌もらひに行きければ

店のかみさん

帳面の名とわが顔とを見くらべて

そばのあるじに何かささやきつ

「奥さんはまだおるすどすかや

お困りどすやろ」

などとお世辞云ひながら

あとにつらなる客たちに遠慮してか

まけときやすとも何とも云はで

ただわれに定量の倍額をくれけり

人並はずれて味噌たしなむわれ

こころに喜び勇みつつ

小桶さげて店を出て

廻り道して花屋に立ち寄り

白菊一本

三十銭といふを買ひ求め
せなをこめて早足に

曇りがちな寒空の

吉田大路を刻みつつ

かはたれどきのせまる頃

ひとりゐのすみかをさして帰りけり

帰りてみれば 机への

火鉢にかけし里芋の

はや軟かく煮えてあり

ふるさとのわがやのせどの芋ぞとて

送り越したる赤芋の

大きながはや煮えてあり

持ち帰りたる白味噌に

僅かばかりの砂糖まぜ

芋にかけて煮て食うぶ

どろどろにとけし熱き芋

ほかほかと湯気たてて

美味これに加ふるなく

うましうましとひとりごち

けふの夕餉を終へにつつ

この清貧の身を顧みて

わが残生のかくばかり

めぐみ登けきを喜べり

ひとりみずから喜べり

というのが「味噌」でございました。小芋を炊いて、

お味噌でお砂糖をかけて、今で言ったら本当に粗食に当
たるんですけど、その頃の時代においては先生にとって
は大変な御馳走であつた訳です。この関常の店は今も残っ
ています。倉庫になっていますが。

続いて非常に人間味豊かな「一箱のキャラメル」とい
うのがあります。その時代はキャラメルなどという甘い
物は全然なかった時代です。大連にいらした次女の芳子
さんが送って下さったのか、キャラメルに感動して作ら
れた詩です。

一箱のキャラメル

大連にゐる洵子と浩子

眼に入れても痛くない

八つと六つになる孫の子が

おぢいさんに上げると云って

キャラメル二箱

送って寄越した

ひとりゐの私はそれを手にとって

嬉しくて涙を落した

だが余りに勿体なくて

すぐそれを口にする気になれなかった

私はその一箱を

近所にゐる孫たちにくれてやり

残りの一箱は

茶棚の抽出にしまひ込んで

長いこと置いておいた

私はたびたび誘惑に襲はれながら

まあまあと思つて

今日まで封を切らずにおいた

そしてそれを小包にし

郷里にゐる母の名を

その表書に書き了へた今

やっと私は

悪いことをしないで済んだやうな

安らかさと嬉しさに浸つてゐる

一箱の、たった一箱のキャラメルを宝物のようにされ

た河上肇先生のお心が何かジーンと来るものがござい
ます。

そして終戦になりました。終戦の後で先生がこれもとつ
てもほほえましい短歌を作つていらっしゃいます。

あなうれしともかくにも生きのびて

戦やめるけふの日にあふ

そして甘いものがお好きであつたという先生ですので
こんな歌があります。

何よりも今食べたしと思ふもの

饅頭いが餅アンパンお萩

死むる日と饅頭らくに買える日と

二ついづれか先きに来るらむ

ということとございまして、今でこそまんじゅうは楽
に買えるんですけど河上先生はこのまんじゅうが楽に買
える時を待たなくてお亡くなりになったのです。

これは昭和二十一年になるんですか、あの野坂参三さ
んが中国から帰られました時つくられた「同志野坂を迎
える」という詩がございます。非常に熱烈たる気迫溢れ
る、もうその前の年の十月頃から栄養失調にかかられて
床に臥してらっしゃったんですけれど、その詩はもう気
力充ち充ちた詩で、当時六十七歳でいらしたんです。そ

の詩をお贈りして最後にしたいと思います。

同志野坂を迎へて

同志野坂

新たに帰る

正にこれ百万の援兵

我軍これより

更に大に振はむ

刑余老残の衰翁

竜鐘として垂死の床に危坐し

声を揚げて喜ぶ

われもし十年若かりせば

非才われもまた

筆を掲げ身を挺して

同志諸君の驥尾に附し

澎湃たる人民革命の

滔天の波を攀ちて

共に風雲を叱咤せんに

露のいのち

落ちなむとして未だ落ちず

幸にけふのよき日に逢ふを得たれども

身はすでに病臥久しきに亘り

体力ことごとく消え去り

気力衰へてまた煙の如し

遺憾なるかな

同志野坂

国を去りて十有六年

万里を踏破して

新たに帰り来るの日

空しくわれ病床に臥して

思ひを天下の同志に馳せ

切にその奮起を祈ってやまず

そして昭和二十一年一月三十日の未明にお亡くなりになつた訳でございます。河上肇先生を偲んで詩を朗読させて頂きました。（拍手）

祝 辞

東京河上会より

河上肇没後四十五周年を記念する集いが、河上肇記念会の主催で行なわれることに、東京河上会々員一同心から連帯と支援を送ります。

私たちも今年一月の総会で、「東京河上会会報」の復刻版刊行を記念事業として行なうことを決定しました。ソ連、東欧の変貌で社会主義の鼎の軽重が問われる今日、河上肇の人と思想はいよいよその重みをなしていくことと確信しております。山口河上会ともども、河上の「真実を求める柔軟な心」を座右の銘にして一歩一歩着実に歩んでいくではありませんか。終りに、河上肇没後四十五周年記念集会のご盛宴を願ってやみません。

東京河上会代表幹事

住 谷 一 彦

山口河上会より

河上肇没後四十五周年記念の集いの開催を心から歓びお祝いの御挨拶を申し上げます。

京都、大阪で没後四十周年の記念の集いが盛大に開かれたのは、つい昨日のことのように想い起こされます。私たちの山口河上会はこのとし四月岩国で第一回総会を開きましたが、それにさきだち二月没後四十周年記念を小郡で開きました。「朝日」、「毎日」は地方版でこの集いを大きく報道してくれました。そのためでしょうか、私たちの予想を遙かにこえる参加者で小さな会場ではありましたが超満員となりました。河上が帰るに帰れなかったふるさと、あのときの私たちの感動、言葉にあらわせません。あれから五年が経過しました。この間の世界の激動、申し上げるまでもありません。河上はこのなかでいっそう強く私たちをとらえて離しません。記念の集いの豊かな実りを信じ、山口でもと期して御挨拶と致します。

山口河上会代表

細 迫 朝 夫

〈新刊紹介〉

塩田庄兵衛著「河上肇」(新日本新書)

清水靖久他編「木下尚江全集 全二十巻」

高沢義人反戦歌集2「いのちきらめけ」

当会々員の方が最近出版され、寄贈を受けたものな
かから右の三著作を簡単に紹介します。

「河上肇」新日本出版社六八〇円

生誕百周年記念行事、没後四十周年記念行事等、当会
の主要な企画の世話人をしていただき、また「貧乏物語」
音読会の代表世話人であった塩田庄兵衛先生(立命大、
東京都立大名誉教授)が河上博士の生涯を年代を追って
わかり易く書かれた絶好の河上肇入門書です。「はしが
き」の一部を引用させていただき紹介に代えます。

「私はこの小さな本で、河上肇という大きな人物の全
体像のスケッチを試みる。予想あるいは期待している読
者層は、これまで河上肇の本を読む機会のなかった人た
ちである。」中略

結果として私は、彼の生活や意見に舌足らずの論評を

加えることを極力控えて、その明快で率直な文章を抜き
書きして綴り合わせる作業を試みたにすぎなかったかも
知れない。しかし、これが「私の河上肇」です、といっ
て読者に提供してみたい気もする。幸いにこの本に誘わ
れて河上肇に深入りしたいという読者があらわれたら、
全集もあるし、専門家の良書も数多くあるので便宜には
事欠かない。「後略」

「木下尚江全集 全二十巻」教文館

(三五〇〇〜四八〇〇円)

「自叙伝」にもたびたび登場する木下尚江翁の全集が
昨年一月より刊行中です。この全集の編集には、今年の
山口河上会第六回総会で記念講演されました清水靖久先
生(九州大助教授)が参加しておられます。

清水先生には既に当会々報三六号で「木下尚江に宛て
た河上肇の手紙」という一文を書いていただけていますが、
この新しい資料の手紙は全集の編集の過程で発見された
ものだそうです。

また、財団法人キリスト教文書センター発行の「本の
ひろば」四月号で、清水先生は「河上肇と木下尚江」と
いう題で木下が河上に与えた影響やこの手紙のことを書

いておられます。なお、この全集は「河上が当然出るものと考えていた木下尚江全集は、その後たびたび企てられたが、木下の死後五十年を経てようやく刊行されはじめた。」（前記「本のひろば」より）もので二ヶ月に一卷の予定で発行されています。

「いのちきらめけ——高齢者憲章讃歌」

全国老後保障地域団体協議会（千円）

元千葉県松戸市議で高齢者運動の先頭に立っておられる高沢義人氏（共産党千葉県委員会顧問、新日本歌人協会）が六月に、反戦歌集2として「いのちきらめけ——高齢者憲章讃歌」を出版されました。その中で「哲学の道——河上肇忌——」として次の六首を歌われています。

洛北の法然院の師の墓に

風花舞えり河上肇忌

法然院の歌碑に手を置き辞世の歌

声あげよめば涙滲み来

「第二貧乏物語」に抛りし高信良海も

「ガ島」に征きて骨も帰らず

「火に投ぜらるるとも思想は枉げず」と

五つとせを小菅の獄に耐えし君はも

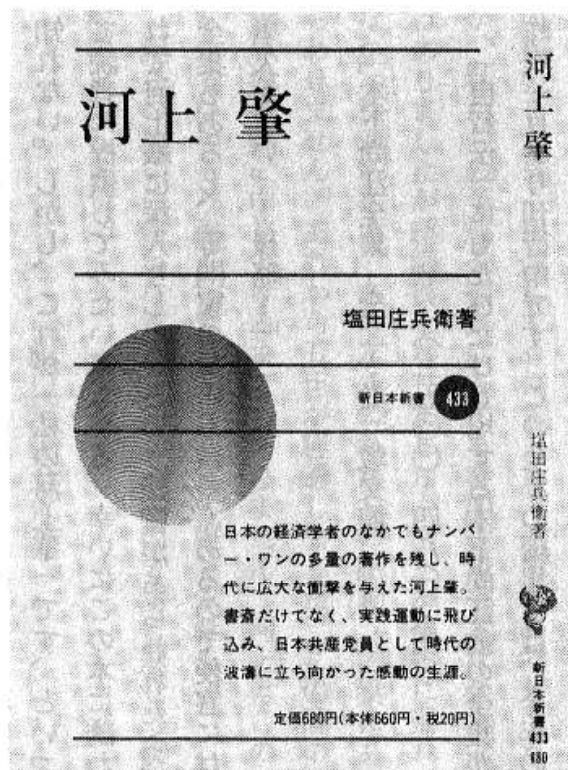
「経済学大綱」の背文字古れども

緋ひもけば若き日の師は凜然と立つ

哲学の道たどりつつ遠き日の

「学連事件」を妻と語り

（沖本 記）



会員通信

腰椎手術やらその他の病気でのこの数年です。会費おさめずすみません。

病氣して忘れられる身ならそれでよしなど思っていましたが一実はさにあらず一会員名を抹消されなかったことを感謝しています。私は今もマルクス、レーニンの示した道を正しいと思っています。この現状も一つの過渡とみています。

会費よくわかりませんが、ご無沙汰のおわびをこめてお送りします。

(秋田県横手市 和泉 とく)
多額のご送金を賜り有難うございました。
(事務局)

九一年四月に四国、松山に転居いたしました。愛媛大学教育学部に勤

務いたしております。

(松山市 松野尾 裕)

平成三年度会費をお送りいたしました。秋の法然院には出席したいと思っております。

(京都市北区 三浦 源一)

私は法然院の上の町内に住んでいるので、しょっちゅう早朝散歩して河上肇の墓前で合掌している者です。

ー中略ー

実は以前に大橋先生の奥さんに(面識はありませんが)梅の木の手入れと梅の実の保存を依頼されたことがあります。いつも誰かが実をとってしまうので果たせませんでしたが、今年はまだ少々残っていましたのでそれを妻に梅酒にしてみました。秋の法要に必要でしたらご連絡下さい。又義父が造園の腕を

もっており梅の枝のせん定が必要ならやるといっていますので、お知らせ下さい。

(京都市左京区 末盛 博巳)

ご苦勞をおかけしています。有難うございます。十月二十日の総会にはぜひ美酒を振舞って下さい。

(事務局)

五月二八、二九日京都で治維法国賠同盟の全国大会が開かれ、最終日京都の湯浅貞夫氏の案内で法然院の河上先生の墓参をし、新しくその偉業に感じました。多くの参加者も同じ思いでした。

(長野市 加藤 孝一)

過般、「治維法国賠同盟」全国大会出席のため御地にまいりました折河上先生のお墓にお詣りすることができてありがたく存じております。

東京に寄り帰宅しましたところおはがきをいただき恐縮いたしました。京都のみなさまのお心にふれたおもいで心にしました。ありがとうございます。

私は八十三才の老人です。若いころアナ・ボル論争などを経て、河上先生や福田徳三博士をはじめ多くの論客の皆さんが総合雑誌などで論争されるのに血を湧かせたのでした。経済学を中心とした論文などを理解しようとマルクスやエンゲルスの著作を対照しながら読んだことを懐かしく思い出します。しかし、一番心に残ったのは先生の「第二貧乏物語」のわかりよい文章と内容だったと思います。そして自分の生き方に決定的な影響をあたえられたのは、先生の逮捕、投獄とその生き方そのものでした。（私も一九三二年から二回検挙されております。）

いま人生の終焉をむかえようとしているとき、先生をはじめ真実を生きようとされた多くの先達や友人を偲ぶことから生きがいのようになっています。

みなさまが記念会の活動をつづけておられることを知り敬慕の念を禁じ得ません。ありがとうございます。

（秋田県湯沢市の庫山寛一様より、墓前の名刺受を管理されている山本正志様宛てのお手紙より）

京都の小泉参次氏のおすすめで加入させていただくことになりました。宜敷くお願い申し上げます。明治四十年十一月五日生、同志社大学法学部卒。

（京都市上京区 秋田清二郎）

帰宅したら会報三七号が待っていました。私事です私には去る一月

二二日で六十才の定年を迎えました。が、考える所があつて、今年四月から来年三月末まで一年間、名古屋市立大学経済学部で研究員を許可され、今日は出校日で帰宅した所でした。

テーマは『「人間の学」として今日の時点で、マルクスの「資本論」を読み直す―主として価値論を中心として―』として教授会に提出しております。会報を手にとりましたが、河上会あの人、この人の堀江邑一さんのインタビューの記事が目にはいり、私の貧しい心の奥底にヒューマンインフルエンスを与え始めております。堀江邑一さんの御健在を心から祈ります。（五月十四日付）

没後四十五周年の集いに「出席」と連絡していましたが都合が悪くなり出席出来なくなりました。

当日の講演はテーマも講師も楽しみにしていましたが、会報で「誌

上参加」いたすことにします。特に「現代資本主義と社会主義」は今日のテーマであり、講師の御専門と結びつけて「会報の発行」を今から楽しみに待っております。事務局御苦勞様です。御盛會を祈ります。

(五月十五日付)

四十五周年記念の集いは御盛會だった事と想像しております。思いつきの提案ですが、四十五周年の一つの企画として

① 河上肇記念会々報のバックナンバーの目次を創刊号より最近号まで河上記念会の貴重な歩みとして次号にのせて欲しい。

② たいへんだと思いますが会員の名簿を発行して頂けませんでしょうか。

御多忙な事務局に更に御負担をお掛けしますがよろしく願います。

(五月二二日付)

(小牧市 岩本 桂)

ご提案有難うございます。①については会報二十号に一号、二十号、三十号に、二一号、三十号の総目次をのせております。四十号になれば、第一号からの総目次も掲載したいと思えます。②については世話人會でも取り上げていますので秋の総會後に編集したいと存じます。

(事務局)

むし暑い毎日が続いておりますがいかがですか。九一年度會費のご送金が遅れて仕舞まして誠に申し訳ありません。

山口河上會の六回總會には運悪く所用がありまして欠席して仕舞いましたが、清水先生の講演内容を細迫さんよりレジメ等を通じましてご教示いただきましたが、とても有意義

だった由、残念でなりませんでした。

「河上會あの人、この人」堀江邑一さん、大変ありがたく読ませて戴きました。直接河上さんをご存じの方が少なくなつて行きますので、この様な先輩を訪ねて記事にして戴くと、とてもありがたく思いました。

會は続ける事に意義があると信じます。山口河上會も河上さんの人間性を慕つて集う人がたとえ少なくなろうとも、細迫先生と共に頑張りたく思います。

向暑の折りです。どうかご自愛の上ご精勵下さい。

(防府市 上田 隆)

拜啓、陳者此の度は貴會々報三七号に、拙歌「京都点景」を御採択下され、その上に貴重な貴誌の一頁をお割り頂いて御掲載賜り誠に有難うございました。

尚、同誌を五部御惠送下さったことに対しても深謝申し上げます。余分に御送付頂いたものは河上先生のことを良く承知して居ります小生の山口高商時代の学友達に送ってやりましたから何卒御了承願ひ上げます。

尚、今回の三七号では、堀江邑一先生と石川興二先生のことを詳細に識り得て幸甚の至りでありました。又、一海知義先生の“河上肇詩注余話”も有難く、楽しく拝誦いたしました。先は右寸緒乍ら御厚礼迄、申し上げます。尚々、貴会の一層の御発展をお祈り申し上げます。

(西宮市 石井 公代)

九一年の会費一金三千円也を送金します。

岩波書店の「河上肇全集」をようやく三分の一を読みました。小学校卒業の学力では河上先生の論文は国

語辞典は離すことが出来ません。会報によって新しい河上先生の発見が楽しみです。

一九三四年六月十五日、八幡製鉄所の現場給仕として入職し、海軍生活を除いて六十年八幡の街と共に歩いて来ました。満七十二才若い気持ちで読書しています。

できるなら歳の始めの会報と共に振替用紙を同封していただけたらと考えます。

編集の皆さんの御活躍と御健康を心からお祈りします。

鉄都八幡から連帯の握手を

(北九州市八幡西区 山上 繁喜)

生前は大変御世話になりました。誠に有難うございました。白水実事、昨年末より入院中でしたが去る五月四日心不全にて死去致しました。

河上肇先生の記念会にも出席する事をいつも楽しみに致しておりますが残念でございました。産経新聞に記事が掲載されましたのを同封させて頂きます。

又会費等未納の分、御知らせ下さいませ。延引ながら、御礼御挨拶迄申し上げます。

(東京都練馬区 白水登志子)

―同封の産経新聞五月八日「葬送」より

『一略―早稲田大学時代から何度も検挙され、日米開戦の翌日には予防拘禁された経験をもつ。その反戦思想は、生涯揺らぐことはなかった。』

四日、心不全で死去。八十四才だった。前日見舞った汎さん(二男、白水商会社長)に「米国、ソ連との関係も大事だが、日本にとって一番重要なのは中国だ。」と話していた。

葬儀の日、中国大使館から届いた弔電は「中国国民の古い友人」と呼びかけていた。親友の再生を信じて、白水さんは旅立った。』

「あめんぼ座」

西垣先生からのお礼

本日は何かとお世話になり有難うございました。懇親会も盛り上り意義ある記念会でしたね。風邪気味で声が嘎れてて、お聞き苦しかったです。しょう。始めての方には、あんな声の人か、と思われたと思いますが、何時もの声を知っていらっしゃる沖本様には、何だか可笑しいとお感じになりましたでしょうね。すみませんでした。

それでも、喜んで下さった方が沢山いらして嬉しく思っています。又、

お気遣いを賜りまして、過分に頂戴し恐縮しております。

置塩先生から大学の方で公演を、とのこともありました。又新しい出会いがあるのではと期待しています。

お世話になりました皆様によりしくお伝え下さいませ。まづは御礼を。

五月十八日

西垣 瑩子

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご一報下さい。



貧乏物語 初版

〒571 大阪府門真市元町二二二四

沖本彰税理士事務所内 河上肇記念会

電話 (〇六) 九〇六―八〇三八

振替口座 大阪 三一三一九五

入会のすすめ

河上肇記念会は、一九七三年に発足して満十八年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会 会則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。
世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。
会費は年額三〇〇〇円とする。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。